

ディスカッション場面における 非主張的な自己表現に関する研究

西澤ほのか 信州大学大学院教育学研究科
茅野理恵 信州大学学術研究院教育学系

概要

本研究では、非主張的な自己表現に焦点を当て調査を行った。研究Ⅰでは、授業のディスカッション場面の非主張的な自己表現を用いる意図についての尺度を作成した。また、その信頼性と妥当性を検討し概ね十分な結果が得られた。研究Ⅱでは、自己表現のタイプと意図、授業のディスカッション場面での不安感、演習の場の影響との関連を検討した。その結果、消極的非主張群は非主張的な自己表現を用いる意図において「スキル不足」が高いこと、ディスカッション場面でのコミュニケーション不安が高いこと、「知的評価」の場面では発言が抑制されることが示された。

キーワード：アサーション、非主張性、コミュニケーション不安

問題と目的

平木（1993）は、アサーションのタイプを攻撃的、非主張的、アサーティブの3種類に分類している。非主張的な自己表現に着目したときに、そのような自己表現を用いる人たちは適応的ではないと見られやすいと考えられる。しかし、非主張的な自己表現を用いる人のなかには、主張することができない人と主張しないことをあえて選択している人がいる可能性が考えられ、主張しないことで自己の適応を保っている人もいるのではないだろうか。その一方で、社会では自分の考えを主張することが求められており、それが評価の対象となる。そのため、意見を主張できるようにしていく援助が必要だと考えられる。

久木山（2005）は、非主張を積極的に選択する者の存在を考慮し、非主張的な自己表現のタイプを、アサーションをしようとして積極的に非主張的アサーションを選択する「積極的非主張」と、アサーションをしようとしてできずに消極的に非主張的アサーションを選択する「消極的非主張」を別にして検討を行っている。「積極的非主張」と「消極的非主張」では、同じ非主張的な自己表現をしていても、そのような自己表現を用いる意図は異なると考えられる。そのため、アサーション・トレーニングの内容も意図を考慮したうえで行う必要があるのではないだろうか。

しかし、これまで主張性尺度はさまざまなものが開発されているが、従来の主張性尺度は、主張性の認知的側面や情動的側面を積極的に測定しようとするものではないことが指摘されている(渡部, 2006)。このことから、なぜ非主張的な自己表現を用いるのかという認知的側面や情動的側面を測定することのできる尺度を作成することが必要であると考えられる。また、非主張的な自己表現の各タイプがどのような意図を持っているのか明らかにすることにより、今後アサーション・トレーニング等の主張性援助を行う際に介入すべき点が明確になると考えられる。また、自己表現の各タイプの不安や、発言が促進・抑制される場の要因を明らかにすることで、より効果的な支援につながると考えられる。

よって本研究では、以下の2つを目的とする。第一の目的は、授業のディスカッション場面で非主張的な自己表現を用いる意図を具体的に明らかにして尺度化することである。第二の目的は、自己表現の各タイプがどのような意図を持っているのか、また授業のディスカッション場面での不安感や、演習の場の影響が異なるのかを明らかにすることである。

研究 I (予備調査)

目的

授業のディスカッション場面において、非主張的な自己表現を用いる具体的な意図を明らかにし、非主張的な自己表現意図尺度を作成することを目的とする。

方法

被験者 中部地方の大学生 28 名を対象とした。

調査内容 質問項目は「下図は授業のなかのディスカッションをしている場面です。矢印の人のようにディスカッション中、自分の意見を言わないまたは言えない人がいます。その人はどのような気持ちで自分の意見を言わない／言えないと思いますか。思いつきかぎり書いてください。」とし、自由記述できる欄を設けた。

手続き 授業終了後の時間を利用し、口頭でアンケートの趣旨を説明した後、質問紙を配布して実施した。

調査時期 本調査は 2019 年 7 月に行われ、下記の分類作業は 2019 年 7 月～10 月に行われた。

結果

収集された回答を、心理学を専攻している大学院生 6 名と、心理の専門家 1 名の計 7 名で分析を行った。偏りや重複を避けるように検討を行い、最終的に 32 項目を選定した。

研究 I (本調査)

目的

予備調査で作成した全 32 項目の非主張的な自己表現意図尺度の信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

方法

被験者 中部地方の大学生 153 名のうち、無回答の 1 名を除外した。その結果、有効回答数は 152 名（男性 54 名、女性 97 名、不明 1 名、平均年齢 21.14 歳）であった。

材料 本調査の質問紙には、次の 2 つの尺度を使用した。一つ目は、予備調査のアンケートをもとに作成した 32 項目の非主張的な自己表現意図尺度である。「あなたは、授業のディスカッション場面で以下のことをどの程度感じますか。」という教示で、回答形式は「全く感じない(1)」「あまり感じない(2)」「どちらともいえない(3)」「やや感じる(4)」「とても感じる(5)」の 5 件法であった。二つ目は、畑中 (2003) によって作成された発言抑制尺度である。全 41 項目で構成されており、「相手志向」「自分志向」「関係距離確保」「規範・状況」「スキル不足」の 5 つの下位尺度からなる。「あなたは、以下の行動をどのくらいの頻度で行いますか。」という教示で、回答形式は「ほとんどない(1)」「あまりない(2)」「どちらともいえない(3)」「たまにある(4)」「よくある(5)」の 5 件法であった。

手続き 筆者が授業時間に調査に関する説明を口頭で行い、質問紙を配布して実施した。

調査時期 本調査は 2019 年 12 月に行われた。

倫理的配慮 本調査は、信州大学教育学部研究委員会の審査を通過している（管理番号：19-23）。質問紙には、研究目的として本調査が「大学生のコミュニケーションに関する研究の一環」であることが記載されている。また被験者の回答はコンピュータによって統計的に処理されるために個人の特定はなされないこと、個人のデータは一切公表しないこと、回答に正誤はないこと、一度質問紙全体に目を通してから調査への参加を決定してもらうことなどの注意事項も明記している。なお被験者に対し研究協力による報酬などは付与しない。

結果

非主張的な自己表現意図尺度の因子分析と信頼性の検討 天井効果が見られた 2 項目と複数の因子に負荷量が高く解釈が困難な 7 項目を除いた、非主張的な自己表現を用いる意図を問う 23 項目に対して重みづけのない最小 2 乗法・直接オブリミン回転による因子分析を行った。直接オブリミン回転後の各項目の因子負荷量を表したパターン行列を表 1 に示す。なお、累積寄与率は 52.52%であった。第 1 因子は「評価懸念」、第 2 因子は「人前恐怖」、第 3 因子は「消極的姿勢」、第 4 因子は「関係維持」、第 5 因子は「スキル不足」、第 6 因子は「妨害不安」と命名した。続いて、尺度の信頼性を検討するために Cronbach の α 係数を算出した。その結果、「評価懸念」は $\alpha = .85$ 、「人前恐怖」は $\alpha = .82$ 、「消極的姿勢」は $\alpha = .66$ 、「関係維持」は $\alpha = .69$ 、「スキル不足」は $\alpha = .79$ 、「妨害不安」は $\alpha = .69$ であった。以上により概ね信頼できる結果が得られた。

構成概念妥当性の検討 非主張的な自己表現意図尺度において下位因子間の相関係数を算出し、構成概念妥当性の検討を行った（表 2）。その結果、それぞれ正の相関があることが確認された。よって、本尺度の構成概念妥当性は概ね示されたとと言える。

併存的妥当性の検討 非主張的な自己表現意図尺度の下位因子と発言抑制尺度の下位因子間の相関係数を算出し、非主張的な自己表現意図尺度の併存的妥当性の検討を行った(表 3)。評価懸念と人前恐怖とスキル不足と妨害不安は、自分志向とスキル不足と正の相関を示した。消極的姿勢は、相手志向と自分志向と関係距離確保と規範・状況とスキル不足と正の相関を示した。関係維持は、相手志向と自分志向と規範・状況とスキル不足と正の相関を示した。以上の結果から、併存的妥当性は概ね示されたと言える。

研究Ⅱ

目的

自己表現の各タイプにおける意図や、不安感、場の影響を検討することを目的とする。

方法

被験者 中部地方の大学生 153 名のうち、無回答や回答に不備があった 2 名を除外した。その結果、有効回答数は 151 名(男性 53 名, 女性 97 名, 不明 1 名, 平均年齢 21.15 歳)であった。

材料 本調査の質問紙には、次の 4 つの尺度を使用した。一つ目は、久木山(2005)によって作成された演習の行動実行ステップ尺度を参考に、「あなたは、非常に疲れているために早めに寝ようとしていた深夜に、相談事をしようとした友人から電話がかかってきて、一向に切る気配がない場合、以下のどの行動を行いますか。もっとも当てはまるものに○をつけてください」という教示で、「今日は疲れていることを伝え、またの機会にしてもらえるように頼む」「こんな時間に電話をかけてくることに対して非難する」「相手が話し終わるまで聞きつづける」「早く切り上げようとするが、いえないままずるずる話を聞きつづける」の 4 つの選択肢であった。二つ目は、研究Ⅰで作成した全 23 項目の非主張的な自己表現意図尺度である。「あなたは、授業のディスカッション場面で以下のことをどの程度感じますか。」という教示で、回答形式は「全く感じない(1)」「あまり感じない(2)」「どちらともいえない(3)」「やや感じる(4)」「とても感じる(5)」の 5 件法であった。三つ目は、McCroskey(1982)によって作成されたコミュニケーション不安尺度(齋藤(2014)より引用)のなかの小グループでの討論場面に関する全 6 項目の質問項目である。「あなたは以下のことをどの程度感じますか。」という教示で、「全くそう思う(1)」「少しそう思う(2)」「どちらともいえない(3)」「あまりそう思わない(4)」「全くそう思わない(5)」の 5 件法であった。四つ目は、出口(1997)によって作成された演習の場が発言行動に与える影響尺度である。全 17 項目で構成されており、「知的評価」「知的要求」「個の対人関係」「集団の受容度」「学習の無意欲」の 5 つの下位尺度からなる。「授業のディスカッション場面で、以下の環境のときあなたはどう感じますか。」という教示で、「発言しにくい(1)」「少し発言しにくい(2)」「どちらともいえない(3)」「少し発言しやすい(4)」「発言しやすい(5)」の 5 件法であった。

表1 直接オブリミン回転後のパターン行列

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
第I因子：評価懸念 ($\alpha = .85$)						
他の人を不快にさせてしまうのではないかと思う	.76	-.07	.10	-.08	.03	.17
自分の意見は否定される気がする	.68	.14	-.12	-.01	.11	.15
他の人を攻撃することになってしまうのではないかと思う	.62	.01	-.12	.07	.00	.05
間違っただけを言っただけではないかと思う	.61	.04	.16	.21	.03	-.21
間違えるかもしれないと思うと怖い	.47	.03	.24	.24	.22	-.22
他の人に威圧されているように感じる	.39	.28	.03	.00	.16	-.01
第II因子：人前恐怖 ($\alpha = .82$)						
人前に出ることが恥ずかしいと感じる	-.07	.99	.02	-.03	.02	.07
人前で話すことに緊張する	-.01	.67	.16	.05	.06	-.09
注目されると居心地が悪いと感じる	.14	.46	-.01	.11	.14	.13
第III因子：消極的姿勢 ($\alpha = .66$)						
他の人の意見が正しいと思うのであえて言わなくてもいいと感じる	-.09	-.01	.66	.02	-.03	.19
他の人の意見と同じ意見は言わなくてもいいと思う	.07	.13	.52	-.03	-.10	-.04
自分の意見を言わなくても話が進むと思う	-.01	.04	.50	-.05	.15	-.03
自分が意見を言うタイミングではない気がする	.10	.08	.37	.20	.10	.19
第IV因子：関係維持 ($\alpha = .69$)						
他の人に自分の意見がどう思われるのか気になる	.01	.04	.01	.82	.17	-.09
話の流れをかえてしまうのではないかと気になる	.09	-.15	.23	.55	.12	.13
異なる意見を持つ人との関係を悪くしたくないと思う	.07	.13	-.14	.52	-.11	.03
第V因子：スキル不足 ($\alpha = .79$)						
自分の意見をどのように伝えたらいいかわからない	.02	.04	-.03	-.03	.89	-.08
自分の意見を言語化することが難しいと感じる	.05	.03	.01	-.05	.67	.04
自分の意見をまとめることができないと感じる	-.01	.08	-.06	.12	.60	.12
第VI因子：妨害不安 ($\alpha = .69$)						
自分の意見をもつことができないと感じる	.08	.11	.14	-.01	.17	.48
他の人とちがう意見なので言えないと思う	.31	.03	.09	.19	-.01	.45
他の人の議論が白熱していて入っていけないと思う	-.03	.01	.17	.24	.10	.41
どの意見の人の立場にも立てないと思う	.18	.07	.03	-.13	.07	.34
因子間相関 F1	—	.39	.23	.41	.47	.32
F2		—	.30	.23	.43	.18
F3			—	.18	.32	.27
F4				—	.24	.12
F5					—	.30
F6						—

表2 非主張的な自己表現意図尺度の下位尺度間の相関係数

	評価 懸念	人前 恐怖	消極的 姿勢	関係 維持	スキル 不足	妨害 不安
評価懸念		.53**	.37**	.50**	.53**	.55**
人前恐怖			.42**	.31**	.48**	.44**
消極的姿勢				.27**	.33**	.46**
関係維持					.29**	.36**
スキル不足						.46**
妨害不安						

**p < .01

表3 非主張的な自己表現意図尺度と発言抑制尺度間の相関係数

	相手志向	自分志向	関係距離 確保	規範・ 状況	スキル 不足
評価懸念	.04	.48**	.01	-.04	.53**
人前恐怖	.15	.39**	.10	.05	.60**
消極的姿勢	.16*	.35**	.20*	.21*	.40**
関係維持	.27**	.59**	.10	.28**	.34**
スキル不足	.07	.36**	-.04	-.10	.70**
妨害不安	.13	.38**	-.04	.03	.46**

**p < .01, *p < .05

手続き 筆者が授業時間に調査に関する説明を口頭で行い、質問紙を配布して実施した。

調査時期 本調査は2019年12月に行われた。

倫理的配慮 本調査は、信州大学教育学部研究委員会の審査を通過している（管理番号：19-23）。質問紙には、研究目的として本調査が「大学生のコミュニケーションに関する研究の一環」であることが記載されている。また被験者の回答はコンピュータによって統計的に処理されるために個人の特長はなされないこと、個人のデータは一切公表しないこと、回答に正誤はないこと、一度質問紙全体に目を通してから調査への参加を決定してもらうことなどの注意事項も明記している。なお被験者に対し研究協力による報酬などは付与しない。

結果

本調査で用いた尺度の記述統計 非主張的な自己表現意図尺度、コミュニケーション不安尺度、演習の場が発言行動に与える影響尺度の平均および標準偏差を表4に示した。

表4 本研究で用いた尺度の平均値および標準偏差

	平均	標準偏差	
非主張的な自己表現意図	評価懸念	2.75	0.84
	人前恐怖	3.09	1.02
	消極的姿勢	3.20	0.72
	関係維持	3.54	0.82
	スキル不足	3.13	0.96
	妨害不安	2.56	0.72
コミュニケーション不安	2.87	0.80	
場が発言に与える影響	知的評価	2.36	0.64
	知的要求	2.60	0.62
	個の対人関係	3.45	0.50
	集団の受容度	3.39	0.80
	学習への無意欲	2.99	0.86

自己表現のタイプ分け 久木山（2005）の行動実行ステップ尺度を参考に、被験者をアサーティブ、積極的非主張、消極的非主張の自己表現のタイプ3群に分類した。その結果、アサーティブ群47名、積極的非主張群49名、消極的非主張群55名に分類された。攻撃的主張群は0人だったため、本研究では採用しないこととした。

非主張的な自己表現のタイプと意図の関連 非主張的な自己表現の各タイプ（積極的非主張群、消極的非主張群）によって非主張的な自己表現意図得点が異なるかどうかを検討するために、非主張的な自己表現の各タイプを独立変数、非主張的な自己表現意図の各下位尺度を従属変数としてt検定を行った。非主張的な自己表現の各タイプにおける非主張

的な自己表現意図の各下位尺度得点の平均値，標準偏差を表5に示す。t検定の結果，「スキル不足」得点（両側検定： $t(102) = -2.38, p = .019$ ）の平均値の差は有意であった。

表5 非主張的な自己表現の各タイプにおける非主張的な自己表現意図尺度の各下位尺度得点の平均値，標準偏差

		平均	標準偏差
評価懸念	積極的非主張	2.68	0.90
	消極的非主張	2.94	0.86
人前恐怖	積極的非主張	3.03	0.97
	消極的非主張	3.36	1.02
消極的姿勢	積極的非主張	3.15	0.66
	消極的非主張	3.41	0.75
関係維持	積極的非主張	3.46	0.90
	消極的非主張	3.72	0.77
スキル不足	積極的非主張	2.97	0.99
	消極的非主張	3.41	0.89
妨害不安	積極的非主張	2.55	0.79
	消極的非主張	2.74	0.68

自己表現のタイプとコミュニケーション不安の関連 自己表現のタイプ（アサーティブ群，積極的非主張群，消極的非主張群）によってコミュニケーション不安得点が異なるかどうかを検討するために，自己表現のタイプを独立変数，コミュニケーション不安を従属変数として一要因分散分析を行った。自己表現のタイプにおけるコミュニケーション不安尺度の得点の平均値，標準偏差，最小値，最大値を表6に示す。分散分析の結果，自己表現のタイプごとのコミュニケーション不安の尺度得点の平均の差は有意であった（ $F(2, 148) = 4.01, MSE = 0.61, p = .020$ ）。自己表現のタイプごとの分散が等質であったため，TukeyのHSD法により多重比較を行った。その結果，アサーティブ群と消極的非主張群，積極的非主張群と消極的非主張群の間では平均値の差は有意であった（ $p < .05$ ）（アサーティブ群＝積極的非主張群<消極的非主張群）。

表6 自己表現の各タイプにおけるコミュニケーション不安の尺度得点の平均値，標準偏差，最大値，最小値

	平均	標準偏差	最小値	最大値
アサーティブ	2.75	0.67	1.33	4.00
積極的非主張	2.74	0.84	1.00	5.00
消極的非主張	3.12	0.81	1.33	4.67

自己表現のタイプと演習の場の影響との関連 自己表現のタイプによって演習の場が発言行動に与える影響得点が異なるかどうかを検討するために、自己表現のタイプを独立変数、演習の場が発言行動に与える影響の各下位尺度を従属変数として一要因分散分析を行った。自己表現のタイプにおける演習の場が発言行動に与える影響の各下位尺度得点の平均値、標準偏差、最小値、最大値を表7に示す。分散分析の結果、自己表現のタイプごとの演習の場が発言行動に与える影響尺度の「知的評価」得点の平均値の差は有意であった ($F(2, 148) = 4.33, MSE = 0.39, p = .015$)。自己表現のタイプごとの分散が等質であったため、TukeyのHSD法により多重比較を行った。その結果、アサーティブ群と消極的非主張群、積極的非主張群と消極的非主張群の間では平均値の差は有意であった ($p < .05$) (消極的非主張群 < アサーティブ群 = 積極的非主張群)。

表7 自己表現の各タイプにおける演習の場が発言行動に与える影響尺度の各下位尺度得点の平均値、標準偏差、最大値、最小値

		平均	標準偏差	最小値	最大値
知的評価	アサーティブ	2.47	0.54	1.50	3.75
	積極的非主張	2.46	0.67	1.50	5.00
	消極的非主張	2.16	0.65	1.00	4.50
知的要求	アサーティブ	2.66	0.58	1.25	4.00
	積極的非主張	2.67	0.65	1.25	4.75
	消極的非主張	2.49	0.64	1.00	4.50
個の対人関係	アサーティブ	3.42	0.50	2.20	4.60
	積極的非主張	3.39	0.44	2.20	4.20
	消極的非主張	3.53	0.54	2.20	5.00
集団の受容度	アサーティブ	3.22	0.79	1.50	5.00
	積極的非主張	3.42	0.81	1.00	5.00
	消極的非主張	3.50	0.79	1.50	5.00
学習の無意欲	アサーティブ	2.95	0.80	1.50	5.00
	積極的非主張	2.81	0.76	1.50	5.00
	消極的非主張	3.19	0.95	1.00	5.00

考察

非主張的な自己表現のタイプによる意図の違い 非主張的な自己表現の各タイプを独立変数、非主張的な自己表現意図の各下位尺度を従属変数としてt検定を行った。その結果、「スキル不足」得点は消極的非主張群が積極的非主張群よりも高いということが示された。積極的非主張群は、自分の意見を言わないことを選択している人たちのことである。

自分自身で選択してあえて言わないという行動をとっているため、意見を伝えるスキルが低いとは感じにくいと考えられる。一方、消極的非主張群は、自分の意見を言いたくても言うことができないと感じている人たちのことである。言うことができなかった経験から、他者にどのように伝えたらいいかわからない、自分の意見を主張できないということにつながっていると考えられる。その結果、「スキル不足」得点は消極的非主張群が積極的非主張群より高くなったと考えられる。

自己表現のタイプとコミュニケーション不安の関連 自己表現のタイプを独立変数、コミュニケーション不安尺度を従属変数として一要因分散分析を行った。その結果、コミュニケーション不安尺度の得点は消極的非主張群が最も高いことが示された。アサーティブ群や積極的非主張群は、自分の意志で意見を言う、または言わないことを選択しているため、ディスカッション場面におけるコミュニケーション不安は消極的非主張群よりも低くなったと考えられる。また、積極的非主張群は、あえて言わない方法を用いることにより適応的な状態を保っている可能性が示唆された。一方、消極的非主張群は言いたくてもいえない人たちのことであり、言うことができなかったという後悔や、次は言わなくてはというプレッシャーを強く抱きやすいと考えられる。その結果、他の2群よりもディスカッション場面におけるコミュニケーション不安が高くなったと考えられる。

自己表現のタイプと演習の場の影響との関連 自己表現の各タイプを独立変数、演習の場が発言行動に与える影響の各下位尺度を従属変数として一要因分散分析を行った。その結果、「知的評価」の得点は消極的非主張群が最も低いことが示された。「知的評価」の項目の中には、「発言が少ない」や「自分の考えがその場において少数派」という内容、また「上級生が多い」や「人数が多い」という内容が含まれている。消極的非主張群は「スキル不足」という意図が他の群よりも高いことが示されている。人数が多くなると、自分の意見をみんなにわかるように伝えなくてはいけないという思いでいっぱいになり、その結果意見をまとめることができず、うまく伝えることができなくなってしまうのではないかと考えられる。そのため、消極的非主張群にとって発言のしにくい場になっていると考えられる。

総合考察

本研究では、第一の目的を非主張的な自己表現を用いる意図尺度の作成、第二の目的をそれぞれの自己表現のタイプがどのような意図を持っているのか、また授業のディスカッション場面での不安感や、発言を促す場の要因が異なるのかを明らかにすることとして質問紙調査を実施した。

研究Ⅰ 非主張的な自己表現意図尺度について

研究Ⅰでは、第一の目的である尺度作成を行った。その結果、評価懸念(6項目)、人前恐怖(3項目)、消極的姿勢(4項目)、関係維持(3項目)、スキル不足(3項目)、妨害不

安（4項目）が抽出され、全23項目の非主張的な自己表現意図尺度が作成された。また、概ね十分な信頼性と妥当性が確認された。

研究Ⅱ 自己表現のタイプと意図、不安、演習の場の影響との関連について

研究Ⅱでは、自己表現のタイプによって自己表現を用いる意図や不安感、発言を促す場の要因が異なるのかについて検討を行った。

消極的非主張の人にアサーション・トレーニング等の主張性援助を行う際には、意見をどのように伝えればいいのかということや、自信のなさという部分にアプローチしていくことが効果的だと考えられる。消極的非主張の人たちにとって負担の少ないであろう人数の少ないグループで自分の意見を主張すること、またその意見の主張の仕方や伝わり方に対するフィードバックを他者に行ってもらうことを通して、上手な伝え方を学んでいくことや他者にも伝わるということを経験して自信をつけていくことによって、ディスカッション場面での不安感は低下するのではないかと考えられる。

また、積極的非主張の人たちは自分の意見を言わないことにより自己の適応を保っていると考えられる。しかし、社会では自分の意見を主張することが求められているため、あえて意見を言わないことが適応を保つ方略だとしても意見を主張することができるように支援を行う必要があると考えられる。今後、積極的非主張の人たちの特徴をより明らかにしていく必要があるだろう。

引用文献

- 出口拓彦 (1997). 授業の発言行動を規定する場の要因について 日本教育心理学第39回総会発表論文集, 250.
- 畑中美穂 (2003). 会話場面における発言の抑制が精神的健康に及ぼす影響 心理学研究, 74, 2, 95-103.
- 平木典子 (1993). アサーション・トレーニング—さわやかに自己表現—のために— 日本精神技術研究所
- 久木山健一 (2005). 青年期の社会的スキルの生起過程に関する研究—アサーションの社会的情報処理に着目して— カウンセリング研究, 38, 195-205.
- McCroskey, J. C. (1982). *An introduction to rhetorical communication*(4thEd). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 齋藤ひとみ (2014). コンピュータ社会論におけるLTDの実践と評価 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 63, 223-228.
- 渡部麻美 (2006). 主張性尺度研究における測定概念の問題—4要件の視点から— 教育心理学研究, 54, 420-443.